

発電設備専門技術者 インタビュー②③

片柳 行雄氏（株式会社東洋内燃機工業社）



ご自身の業務経験を振り返る片柳さん

東名高速道路川崎インター近く、この一帯では貴重な自然と憩いの場である神奈川県立東高根森林公園の隣りに、片柳行雄さん（64歳）が勤務する株式会社東洋内燃機工業社がある。発電機用やクレーン用エンジンの整備、ラインマーカ車の製造を行う同社の一室にて片柳さんは紺色の作業服に身を包み、気さくに我々のインタビューに応じてくれた。

返還間もない沖縄での業務

片柳さんは昭和27年東京生まれ。大学では電気工学科を選んだ。就職活動はオイルショック後の不況の最中であつたが、大学の薦めにより昭和51年に同社に入社した。入社早々、沖縄へ出張した。米軍から返還されたばかりの航空自衛隊基地の常用発電設備のオーバーホールのため、4名1チームの一員として分解組み立ての一連の作業で、有機溶剤を用いての部品洗浄が専ら片柳さんの仕事であつた。

「当時は素手で洗浄していたので、次第に手が腫れてしまったりして大変でした。先輩社員の傍らにいて、分解や組み付けの技を盗んでいましたよ。」

ご多分に漏れず先輩社員には職人気質の方が多かったという。若い社員の大半は地方からの上京組で、昼間は業務に勤しむ一方、夜間は社費にて大学に通っていた社員もいた。知識やキャリアを習得するため、当時の社長であり創業者でもあつた柴田敬蔵氏（故人）の方針によるものであつた。

現在は潤滑油の性能が向上したこともあり、発電設備のオーバーホールの間隔は大分伸びたが、当時は約8,000時間の周期で分解整備を行っていた。離島を含む航空自衛隊の各基地を巡回整備するため、20代の片柳さんは毎年の様に1970年代の沖縄を頻繁に訪れていた。

「出張当初は自動車も右側通行でした。冬期の出張は飛行機の乗客も少なくて貸切りみたいでしたね」と懐かしそうに語る。

中東で発電機用原動機を整備

昭和57年、片柳さん30歳の時、エジプトスエズ湾にて海洋掘削中のリグ（油田基地）に搭載している原動機整備のため、初めて海外業務に携わつた。掘削会社やゼネコンらによるプロジェクトである。9月、片柳さんらはカイロから国内線にてシナイ半島に渡り、ヘリコプターにて沖合のリグへ辿り着いた。



片柳さんらが滞在したリグ「白竜号」

リグは巨大船の様なものである。管制室から機関室、宿舍等様々な施設が存在している。但し、発電設備が設置してある機械室は鋼板に覆われ空調も無く、片柳さんらは暑さと湿気と騒音の中、分解、洗浄及び組立作業を行った。

技術に加え気力体力の必要な任務であつたが、無事務め上げ帰国した。しかし半年後、片柳さんに緊急連絡が入つた。整備対象外であつたが、原動機1台のクランクシャフトが折損したとの一報である。シャフトに生じる

ねじり振動を減衰するダンパが劣化したためだった。再び片柳さんは現地へ乗り込むも、代替品の米国からの空輸に時間が掛かり、滞在期間は大幅に延びた。疲労も重くなった。そんな時は、甲板に出て、リグの乗組員達と釣りに興じたりもした。

クランクシャフトも到着し交換作業は苦勞の末、完了。最終的に片柳さんの洋上生活は2ヶ月に及んだ。



リグの発電設備を整備中の片柳さん
(右、昭和57年)

5年後の35歳、片柳さんは三たび中東の地を踏むことになる。サウジアラビアの護岸工事で、あらかじめ日本より運んだ計14台の可搬形発電設備をオーバーホールするためである。サウジアラビア、インド、フィリピン、ソマリアの国籍を持つ人たちと作業を行い、彼らの監督者として3ヶ月間指揮を執った。片言の英語と身振り手振りでの指示伝達であったが、大任を務め上げることが出来た。表情を緩めながらこう話す。

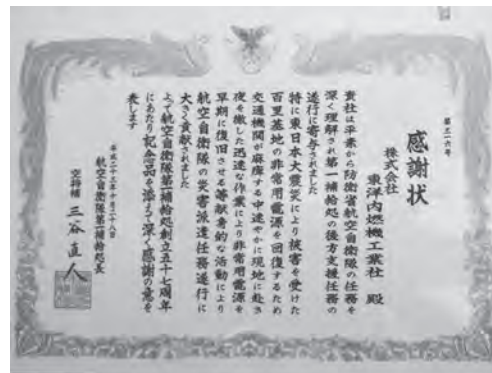
「でも、サウジはイスラム国なので、アルコールが一切飲めなかったのはつらかったなあ。」

本業にて震災復旧に寄与したい

東洋内燃機工業社は沖縄のほかにも、多くの航空自衛隊基地の発電設備整備を長年請け負っている。5年前の東日本大震災の際、片柳さんは既に事業部長となっていたが、請負先である茨城県の基地の非常用発電設備が停止したため、至急調査して欲しいとの依頼が第1補給処よりあった。震災時、各基地は災害派遣拠点となっていたが、同基地も、多くの被災者を救助する重要な任務が与えられていた。

その日のうちに自衛隊車両の先導で現地へ到着した。原因は、燃料小出槽に溜まったスラッジが地震で舞上がり、フィルタが詰まり原動機が燃料不足で停止したためである。片柳さんらは夜を徹して燃料配管系の清掃整備を行い、翌朝には復旧させることができた。

宮城県の基地からも非常用電源の復旧要請があった。基地は高さ2m以上の津波に襲われ、冠水のため基地機能は完全に喪失、非常用発電設備も一部が海水につかり機能停止していた。片柳さん自ら先頭に立ち、設備の入



航空自衛隊から頂いた感謝状

替作業に当たる。被災地支援について語る。

「被災地への貢献の仕方は色々あると思いますが、我々は本業にて復旧・復興に寄与していきたい。そのためには平日頃から技術・技能を磨いておかないと、とても対応出来ないと痛感しています。」

お客様の立場にたった整備を

片柳さんは、発電設備を含む産業機械の永年の整備技術が認められ、神奈川県より平成18年に優秀技能者表彰を、同24年に卓越技能者表彰を授彰している。現在は、後進の育成に今まで以上に注力しているという。自身も職業訓練指導員(建設機械科)の免許を取得し、分かり易い指導方法を日々探求している。現在の技術系社員は45名、可能な限り工場にて現品・現物に基づき実践指導している。

「自動車整備の経験者は電気関係も飲み込みが早いです。でも、畑違いの職場から転職してきた人でも、入社後に資格を取得して頑張って勤めていますよ。」

同社では入社3年目以降の社員を、海外に派遣している。社員は原動機メーカーや保線機械メーカーの研修に参加し、電子制御など各社固有の先端技術をマスターし帰国してくるといふ。訓練を積んだ社員を、社長は自信を持って、リーダーとして現場へ送り出している。最後に片柳さんは整備業の心構えを語った。

「私の今までの経験から言えることは、整備業にあたる者は、お客様の立場に立った整備をして欲しいですね。それが顧客や取引先への信用にきつと繋がると信じています。」